

年齢層の異なる大学生の環境意識の差異に関する考察

A study of difference for the environmental awareness of university students of different age groups

和田 有 朗

キーワード：環境意識、年齢層、大学生、質問紙調査、属性比較、評価

要 旨

本学学生を対象に年齢構成による環境意識の差異を検討するため質問紙調査を実施した。学生は、マイバックの持参率やごみ分別の意識が高く行動している人が多く、環境配慮を心がけている人も多い。また、環境活動への協力意志も高い。学生よりシニア学生の方が環境意識が高い傾向が示された。環境意識を向上させるために義務教育の中で、環境に関する科目に力を入れることと地域の環境保護に関するイベントや啓発活動などをもっと増やして実行力を高めることを重要視していることが示された。

1. はじめに

近年、地球温暖化防止への認識が世界的に高まる中、さまざまな環境問題の解決は重要な事項である。これらの問題に対し、さまざまな解決策が取られているが、重要な施策の一つに、環境教育によって人々の日常的な生活行動を環境に配慮した行動へ導こうとする取り組みがある（環境省2004, 2005）。地球環境問題については、その本質を理解し、問題解決に向けて行動できる人材を育てる環境教育や持続可能な発展のための教育（Education for Sustainable Development, ESD）（関係省庁連絡会議, 2006）の重要性が高まっている。

環境教育は、1970年代の公害問題に対する取り組みとして始められ、現代では学校教育にとどまらず、企業教育、生涯学習など様々な分野に広がり、関心も高まっている。しかし一方では、環境に対する知識や態度は身につけているものの、行動までには結びついていないことが指摘されている（榎本1994, 広瀬1995, Kuhlemeier et al. 1999, 大友2004）。

将来を担う大学生を対象に、生活に関わる環境要素をどのような視点で全体的に捉えているかを調査し、大学生の環境問題への認識と理解度、環境への評価がどのようなになっているのかを解析して、地球環境問題への対応や効果的な環境政策をとることが環境政策の実効をあげる上で重要となっている。

大学生の環境意識と環境保全行動について様々な調査や研究が行われている。佐々木ら

(2003) は宇都宮大学教育学部生の環境意識および行動に関するアンケート調査を行い、環境に関する教育が学生の意識や日常の行動に与える影響をみている。その結果、環境に関する知識や興味関心ともに環境教育課程の学生の方が高いが、日常生活における環境行動に関してはエコロジストの域に達していないことがわかったとしている。しかし、環境教育の効果は発揮されつつあり、宇都宮大学生の環境マインドを高める上で果たす役割は大きいとしている。

青柳ら(2009) は大阪工業大学工学部新入生へ環境意識調査を行い、環境に配慮する意識は比較的高かったが、環境負荷を軽減させるために自分の生活が不便になることに対しては積極的ではなく、また環境保全活動に参加する意欲も低かったとしている。他大学と比較する限り、新入生は総じて環境に対する意識が低いと言わざるを得ないとしているが、環境を守るには「意識」の高さが重要と考え、また環境保全は大切なことと認識しながらも、進んで行動しようとしない本学の学生の姿が浮かび上がったと報告している。

麓・榊原(2002) は、一般的に若者は環境保全活動の参加度が低いと言われている中で、大学生がごみに対してどのような意識を持ち行動しているのかを調査し、今後ごみに対する意識を高めるにはどうしたらよいのかを考察している。対象者の大学生は、環境に対する知識はやや高いが、ごみを正しく分別している割合が低く、積極的なごみ削減のための行動ができていなかったことなどから、知識が直接行動とは結びついていないことが判明したとしている。

このように大学生の環境意識は高まりつつあるものの、依然として関心が低いことから、大学生が行動に移さない要因は何か、どのようにすれば行動に移すのか等既往文献から得られている知見と今回、大学生に対する質問紙調査を行った結果から以下に考察する。

大学生は現在の環境問題をどのように認識し、把握し、理解して評価をしているのか。その認識は深いものなのか、どの程度のレベルなのか。これらの点を明らかにすることは教育機関はもちろん行政や民間等において今後の環境政策、施策を行っていく上で重要な基礎情報になる。また、本学においては、「シニア50+入試制度」があり、50歳以上の大学生が在籍している。これらの年齢層の異なる大学生の環境意識の違いを見ることは重要である。

本論文の目的は、大学生の環境意識と行動がほぼ近くなっていくように、大学生の環境問題の認識を調査し、ごみ分別の状況、節水・節電状況、環境配慮への心がけ、環境活動への協力意志、環境意識を向上させるための方法等を明らかにし、年齢構成によってそれらがどのように変わるのかを明らかにする。

2. 調査概要

2-1 調査概要

2012年9月から2012年10月末までの2ヵ月の間、授業以外の時間を利用して、神戸山手大学と神戸山手短期大学の合計201名の学生を対象として、環境意識と行動のアンケート調査を実施した。

主な質問項目は、普段の買い物、ごみのリサイクル、生活習慣、住環境、環境に関するイメージなどで5つに分類される。

- (1) 普段の買い物は、レジ袋の持参状況、詰め替え商品の購買使用状況等である。
- (2) ごみのリサイクルは、ごみの分別ルール、ごみ・ペットボトルのキャップの分別状況等である。
- (3) 生活習慣は水、電気等の使用状況である。
- (4) 住環境は、住環境、環境のイメージ等を通して、普段の生活と環境の関わりについてである。
- (5) 環境に関するイメージは環境への配慮、環境活動への協力意志等である。

2-2 回答者の属性

アンケートの回答者の属性を表1に示す。男女別にみると、女性の方が男性より少し多い。学年別には一年生と三年生がほぼ三分の一を占めている。二年生とシニア学生と留学生は約1割を占めている。シニア学生は調査時において、全学で40名程度であったため、半分程度の方から回答を得ている。学科別には大学が大半を占めていて、その中で環境文化学科は半分を占めている。家族構成別には、実家住まいの方が一人暮らしより多くなっており半数以上を占めている。最後に、住まいは一戸建てと集合住宅ではほぼ半数に分かれている。

表1 回答者の属性

性別	男 性	43%	学 科	大学	環境文化学科	51%
	女 性	57%			都市交流学科	34%
学 年	1 年生	35%		短 大	生活学科	11%
	2 年生	11%			キャリア・コミュニケーション学科	3 %
	3 年生	29%			表現芸術学科	1 %
	4 年生	2 %				
	シニア	11%		家族構成	一人暮らし	37%
	留学生	11%			実家住まい	58%
	履修生	1 %			その他	5 %
				住 ま い	一戸建て	49%
			集合住宅		51%	

(注) いずれも合計100%として表示

3. 年齢層の異なる大学生の環境意識

大学生の環境意識についての結果を示す。なお、大学生の環境意識は年齢層によって異なるという仮説をたて、それを検証するため大学生（20代以下）とシニア学生（50代以上）という年齢層の異なる大学生の環境意識の違いを考察した。なお、学生とは20代以下の若年層の大学生を意味し、シニア学生とは50歳以上の学生を指す。

3-1 マイバッグの持参状況

マイバッグの持参状況を図1に示す。「たまに持っていく」が半数近くを占め、次いで「持っていない」が約3割、「持っていく」が約2割となっている。「持っていく」と「たまに持っていく」を合わせると6割以上を占め、多くの人がマイバッグを持って買い物に出かけていることがわかる。これらは一人一人が実行できる、もっとも身近な環境保護運動の一つであるため意識の高い人の割合が多い結果となっていると示唆される。

学生とシニア学生間においては、マイバッグを「持っていく」と選択した割合はシニア学生の方が学生より2倍近く多くなっている。一方、「持っていない」と選択した学生とシニア学生の割合は3割強ではほぼ同じである。以上のことからシニア学生はマイバッグを持って買い物に出かける意識が高い傾向にあることがわかる。

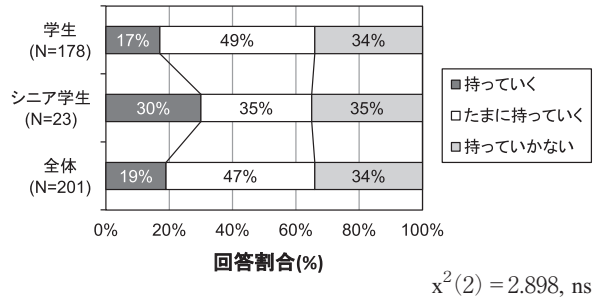


図1 マイバッグの持参状況

3-2 ごみ分別の状況

ごみ分別の状況を図2に示す。「だいたい分別している」が半数を占め、次いで「細かく分別している」が2割強を占め、「あまり分別していない」が2割を占め、「分別はしていない」は1割弱となっている。「細かく分別している」と「だいたい分別している」を合わせると7割以上を占め、多くの人がごみを分別しており、分別回収への意識の高さがうかがえる。

学生とシニア学生間においては、「細かく分別している」において、シニア学生の割合は学生の2倍以上を占めている。「だいたい分別している」において、学生の回答割合は半数以上を占めている。このことからシニア学生の方がより分別を細かくしていることがわかる。ごみの分別には10代後半から20代にかけての若い世代の市民にまだ多くの無関心層が見受けられる（内田・井上、1996）といったように、個人属性によって行動に差があることが指摘されているが、本学には環境文化学科があり、学生はごみの分別を比較的によく行っている傾向がみてとれる。「あまり分別していない」と「分別はしていない」では、学生の方がシニア学生より回答割合が

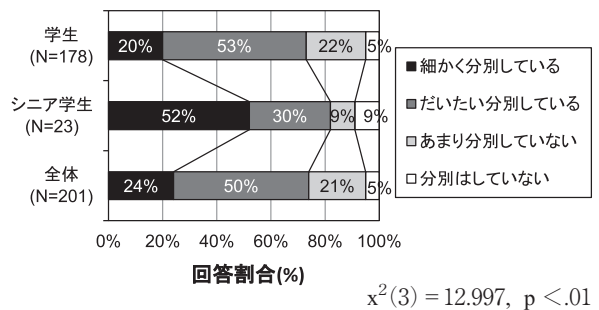


図2 ごみ分別の状況

高いことからシニア学生の方が分別回収に対する意識が高いことが示唆される。

3-3 シャワー使用時の節水状況

シャワー使用時の節水状況を図3に示す。「使う時以外いつも止める」が3割強を占めており、次いで「たまに止める」が3割を占め、「だいたい止める」が約2割となっている。一方、「水を流しっ放し」にしている人は2割弱であり、多くの人がシャワー使用時には使う時以外は止めるようにしており、節水意識は高いことがわかる。

学生とシニア学生間においては、シニア学生の「使う時以外いつも止める」と答えた回答割合は、半数以上を占めており、学生よりも回答割合が高いことから、学生よりシニア学生の方がシャワー使用時の節水意識が高い傾向にあることが示唆される。

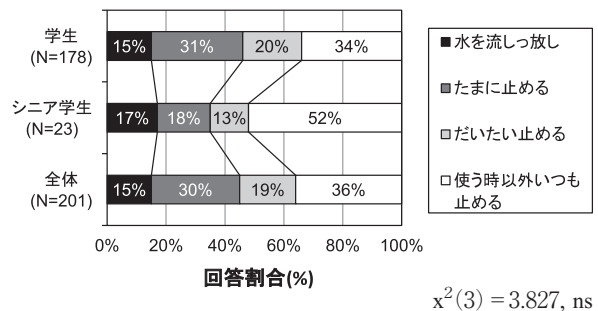


図3 シャワー使用時の節水状況

3-4 テレビの節電状況（使用状況）

テレビの節電状況を図4に示す。「リモコンで消す」が6割を占め、次いで「主電源を切る」は2割強を占め、「コンセントを抜く」と「付けっぱなし」は1割弱である。「コンセントを抜く」という行動はできていない人の回答割合が高く、多くの人が「リモコンで消す」か「主電源を切る」という行動をしている。一方、「付けっぱなし」にしている回答割合は非常に少ないことから節電意識は高いことがうかがえる。

学生とシニア学生間においては、「付けっぱなし」の回答割合は学生の1割弱に対してシニア学生は0%で全くなく、「コンセントを抜く」の回答割合は学生の1割弱に対してシニア学生は2割であることから、テレビの節電でも学生よりシニア学生の方が節電意識が高いことが示唆される。

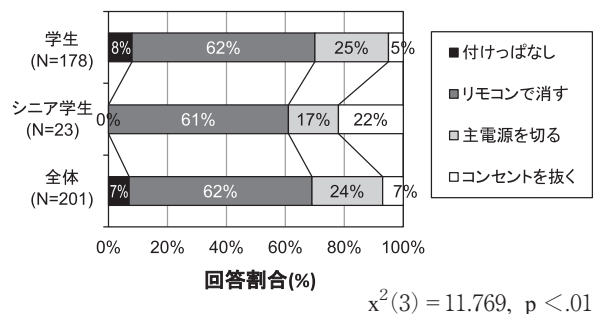


図4 テレビの節電状況

3-5 環境問題のイメージ

環境問題のイメージを図5に示す。「地球温暖化」「車の排気ガス」が多く、次いで「大気汚染」「騒音」「生活ごみ」となっている。近年、話題になり注目されていることや身近なことをイメージする人が多いことが示唆される。

大学生が関心をもっている環境問題は、既往研究で報告されている。大阪工業大学の調査（2009）では、構成比率が異なるものの約70%の学生が「地球温暖化」を挙げている点が共通している。地球温暖化とその影響はテレビや新聞等マスコミに頻繁に登場するようになったが、本学の学生が環境問題のイメージとして地球温暖化を挙げた

のは、テレビや新聞などのメディアへの登場頻度を反映しているためと推測される（図6）。

学生とシニア学生間においては、学生、シニア学生両方とも、環境問題のイメージで「地球温暖化」と「車の排気ガス」の回答割合が高い。シニア学生は、「騒音」の回答割合も高く、学生の2倍程度になっている。一方、「大気汚染」「植物減少」においては学生の方がシニア学生の回答割合の2倍程度となっており、学生とシニア学生のイメージに差があることが示唆される。

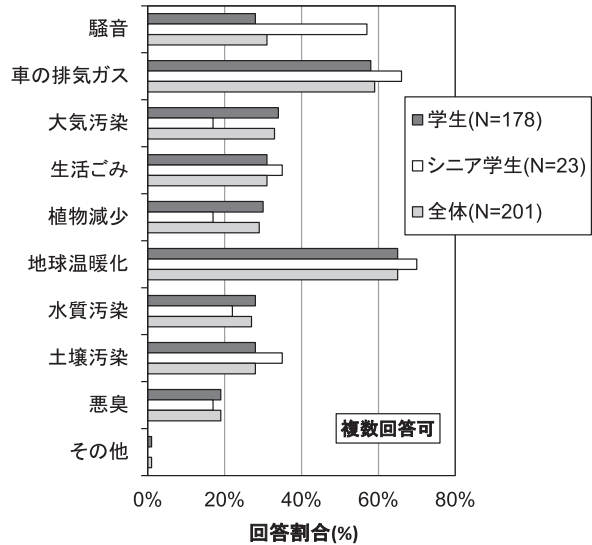


図5 環境問題のイメージ

3-6 環境情報の収集方法

環境情報の収集方法を図6に示す。「テレビなどのニュース」「新聞」が多く、次いで「インターネット」「授業」となっている。

学生とシニア学生間において、環境問題に関する情報源については、学生、シニア学生ともに「テレビなどのニュース」というマスコミの情報源を一番よく利用している。学生は、「インターネット」の回答割合が高く、シ

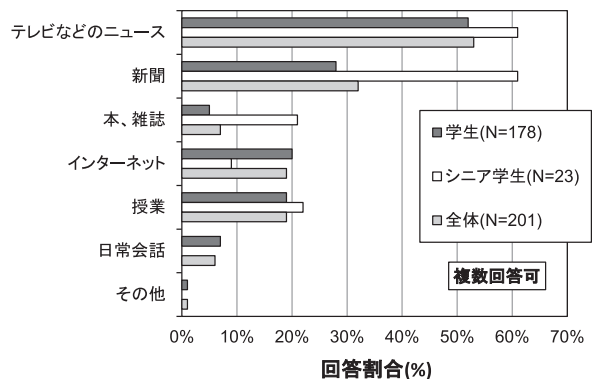


図6 環境情報の収集方法

ニア学生の2倍以上になっている。一方、シニア学生は「新聞」の回答割合が高く、学生の2倍以上になっている。さらに、「本、雑誌」においてもシニア学生の回答割合が学生の3倍以上になっている。以上のことから、学生とシニア学生の差異については、学生は特に「インターネット」をよく利用し、シニア学生は「新聞」をよく利用していることから、情報源のメディア媒体に違いがあることが示唆された。

3-7 環境配慮への心がけ

環境配慮への心がけを図7に示す。環境への配慮をどの程度心がけているかについては、「どちらかと言えば思う」が4割を占め、次いで「どちらかと言えば思わない」が2割強で、「思う」が2割、「思わない」が1割となっている。「思う」と「どちらかと言えば思う」を合わせると6割を超えることから、環境への配慮を心がけている人の割合が多いことがわかる。

学生とシニア学生間においては、環境への配慮を心がけていると「思う」において、シニア学生の回答割合は学生の2倍以上を占めている。「思う」「どちらかと言えば思う」を合わせた学生の回答割合は6割であり、シニア学生の回答割合は8割近くに達している。以上のことから環境配慮への心がけでも学生よりシニア学生の方が環境配慮への意識が高いことが示唆される。

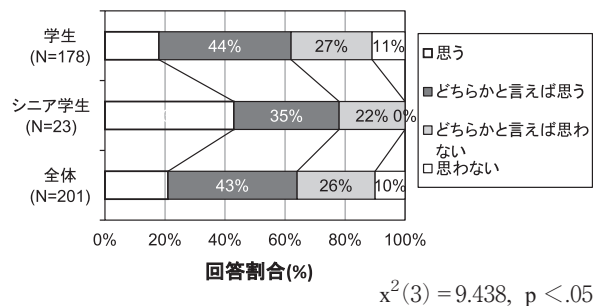


図7 環境配慮への心がけ

3-8 環境活動への協力意志

環境活動への協力意志を図8に示す。「できれば参加したい」が4割を占め、次いで「状況による」が3割を占め、「参加したい」「できれば参加したくない」が1割強で、「参加したくない」が1割弱となっている。「参加したい」と「できれば参加したい」を合わせると半数を超えることから、環境活動への協力意志は高いことがうかがえる。

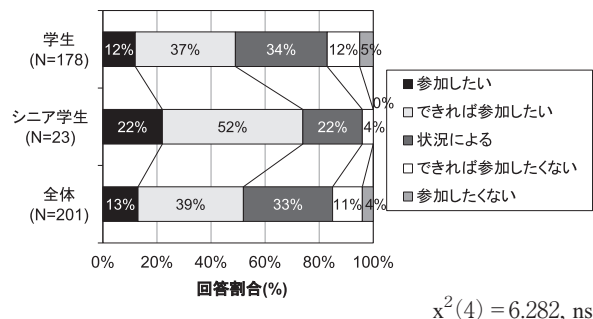


図8 環境活動への協力意志

学生とシニア学生間においては、「参加したい」「できれば参加したい」でいずれも学生よりシニア学生の回答割合が高くなっている。「参加したい」「できれば参加したい」の両方を合わせても、学生は約5割に対して、シニア学生の方は7割を超えていることから環境活動への協力意志でも学生よりシニア学生の方が協力意志が高いことが示唆される。

3-9 環境意識を向上させるための方法

環境意識を向上させるための方法を図9に示す。「義務教育の中で、環境に関する科目をもっと力を入れないといけない」「地域の環境保護に関するイベントや、啓発活動などをもっと増やした方がいい」が多く、次いで「テレビなどの媒体、エコに関する内容をもっと増やした方がいい」となっている。現在、全国で環境教育が取り組まれているが、学生とシニア学生の両方とも環境に関する科目としてもっと力を入れることを望んでいると示唆される。

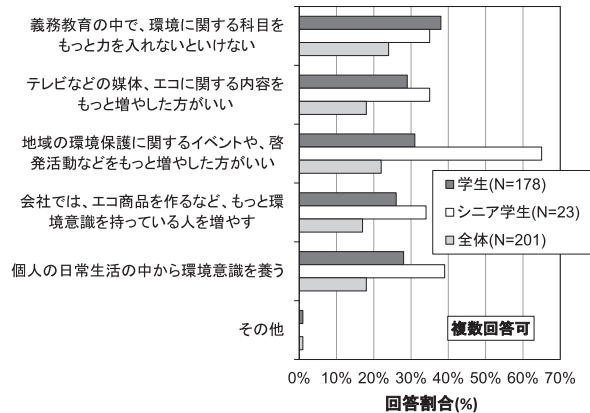


図9 環境意識を向上させるための方法

学生とシニア学生間においては、学生は、「義務教育の中で、環境に関する科目をもっと力を入れないといけない」の回答割合がやや高いが、シニア学生は、「地域の環境保護に関するイベントや、啓発活動などをもっと増やした方がいい」の行動実践への回答割合が高い。また、「個人の日常生活の中から環境意識を養う」「テレビなどの媒体、エコに関する内容をもっと増やした方がいい」等は、シニア学生の回答割合がやや高いが、学生とシニア学生でさほど差はない。

4. おわりに

年齢層の異なる大学生の環境意識について質問紙調査を行い考察した。本論文により明らかになったことを以下に示す。

マイバックの持参率やごみ分別の意識が高く行動している人が多いことがわかった。環境問題のイメージは地球温暖化への関心が高く、既往研究と同様の傾向が確認できた。環境への配慮を心がけている人が多く、環境活動への協力意志も高いことがわかった。環境意識を向上させるための方法としては学生とシニア学生の両方とも義務教育の中で環境に関する科目としてもっと力を入れていくことを望んでいることが明らかになった。

年齢層の異なる大学生の環境意識については、学生はマイバックの持参率、ごみ分別の意識

が高いが、いずれにおいてもシニア学生の方が意識がより高い傾向にあることが示唆された。節水、節電においてもシニア学生の実行率、行動力が高いことがわかった。環境情報の収集方法は、学生は特に「インターネット」をよく利用し、シニア学生は「新聞」をよく利用していることから、情報源のメディア媒体に違いがあることが示唆された。環境配慮への心がけや環境活動への協力意志についてもシニア学生の方が意識がより高い傾向にあることが示唆された。環境意識を向上させるための方法について、学生は、「義務教育の中で、環境に関する科目をもっと力を入れないといけない」の回答割合がやや高いが、シニア学生は、「地域の環境保護に関するイベントや、啓発活動などをもっと増やした方がいい」等実践活動の回答割合が高く、重要視していることに違いがあることがわかった。

環境問題に対する行政の政策や環境配慮の政策をとっていく場合に、これからの将来を担う大学生の協力はもちろん欠かせない。今回検討した年齢層の違いによる環境意識の差異は今後、実践、実行する上でさらに重要になり、これからの環境政策をつくる上で参考になるものである。

なお、今回授業以外の時間に調査を行ったため、母集団に多少の偏りが生じたが、本学の学生構成からみると妥当な範囲で調査ができたと考えている。入学時から卒業時までの環境教育を受けた4年間の環境意識の変化についての調査・分析については今後の検討課題である。

謝辞

神戸山手大学卒業生の王亜平氏には調査および図表作成にご協力頂きました。さらに、本調査に御協力いただいた学生の皆様方に厚くお礼と謝意を申し上げます。

参考文献

- 青柳正人・上久保敏・井上晋・野村良紀（2009）工学部新入生の環境意識と「淀川学」の教育効果，大阪工業大学紀要，Vol.54，No.1，pp.1-11.
- 榎本博明（1994）環境情報としての実践的対処知識の重要性について，環境教育，3(2)，pp62-67.
- 麓早百合・榊原典子（2002）大学生のごみの分別意識について，京都教育大学環境教育研究年報第10号，pp.19-28.
- 広瀬幸雄（1995）環境と消費の社会心理学，名古屋大学出版会.
- 環境省（2004）平成16年版環境白書，（株）ぎょうせい，p.282.
- 環境省（2005）平成17年版環境白書，（株）ぎょうせい，p.280.
- 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議（2006）わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画.
- Kuhlemeier, H., Bergh, H, V, D., and Lagerweij, N. (1999) Environmental Knowledge, Attitudes, and Behavior in Dutch Secondary Education, The Journal of Environment Education, 30(2), pp.4-14.
- 大友章司（2004）環境リスク行動の2つの意思決定プロセスと非環境配慮的行為者のイメージが行動決定に及ぼす影響について，環境教育，13(2)，pp.25-34.
- 佐々木和也・箕輪祐一・清水裕子（2003）ISO14001取得による環境教育効果　一字都宮大学教育学部生の

年齢層の異なる大学生の環境意識の差異に関する考察

環境意識調査を通して一，宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，第26号，pp.105-110.

内田治・井上仁（1996）環境部の2課が競い合う？ ―市民への意識啓発 三鷹市の場合―，都市清掃，第49巻，第210号，pp.30-34.